

必見!これからの学力調査が変わる

～ 次世代型学力・学習状況調査(仮称) で可能な3つのこと ～

令和5年度から新しい京都府の学力診断テスト(対象:小学校4年生~中学校3年生)を目指し、調査研究を行っています。

なぜ?次世代型学力・学習状況調査(仮称)に変わるのか?!

今までの学力調査では・・・

	点数	平均点
小4	60	55
中1	65	70

点数が上がったから学力も伸びた?

平均点より下なので学力は下がった?

集団の中でのそれぞれの位置は分かるが、個々の学力はどのくらい伸びているのだろうか?

児童生徒一人一人の学力の伸びやつまづきを細やかに把握し、個々の適切な指導や支援につなげるためです。

児童生徒一人一人の学力の伸びと非認知能力の変容を継続的に把握する。

非認知能力等の変容を継続的に把握するための質問調査

IRT(Item Response Theory)とパネルデータによる学力分析の手法を取り入れた学力調査

CBT(Computer Based Testing)による学力調査

次世代型学力・学習状況調査

Q IRTとは何ですか?

A IRT(項目反応理論)とは、正答率ではなく、どの程度の難易度の問題を解く力があるかで学力を測定する理論のことです。難易度の基準がそろえてあるため、異なるテストでも結果の直接比較が可能となります。

このようなテスト方式は、TOEIC、TOEFL等の国際的な試験でも採用されています。なお、テストの難易度を測るため多大量の問題を蓄えておく必要や同じ問題を出題する必要があるため、問題は非公開となります。

Q パネルデータとは何ですか?

A 同じ児童生徒を継続的に複数の項目にわたって記録したデータです。児童生徒に番号を配布し追跡できるようにします。

Q CBTとは何ですか?

A コンピュータやタブレット端末を利用して行うテストのことです。テストがCBT化されることで個々の特性に合わせて文字サイズの変更ができたり、結果が即時に確認できます。また、動画の問題が出題可能となります。

Q 学力・学習状況調査の結果分析や活用ではどのようなことを意識したらよいのですか?

A 調査結果の数値と教師の見取りの両面からこれまで以上の児童生徒理解につなげ、一人一人の指導・支援の充実を図ることが大切です。また、児童生徒それぞれの学習改善が図れる指導や教師自身の授業改善へもつなげる必要があります。

次世代型学力・学習状況調査(仮称)によって可能な3つのこと

①

問題の難易度に左右されず
経年比較ができる

②

認知能力だけでなく
非認知能力の変容も
測ることができる

③

採点時間を短縮し
即指導に活用できる

①

正答率ではなく問題の難易度に応じて学力が測定できるのでテスト結果の経年比較が可能

例えば、同じIRTを採用しているTOEICで言うと

TOEIC=国際コミュニケーション英語能力テスト

1回目

520点だ

2回目

580点だ

直接比較可能

いつ、誰が、どこで受験をしても、520点より580点の方が英語の力があると判断している。

異なるテストでも、同じ基準で問題の難易度が設定されているため、結果を経年で比較することが可能になります!

さらに、個人に番号を配布し追いかける仕組み(パネルデータ)を用いて、経年での学力の推移が把握できます。

②

学力の伸びと、学習の仕方や非認知能力の変容等の相関関係からの分析が可能

伸び悩んでいる児童生徒を多面的に把握し、議論

児童生徒は

自分自身の学習習慣の振り返りと今後の目標設定

教師は

個に応じた効果的な指導及び支援を検討

例えば・・・

学力が伸び悩んでいる児童生徒は、前年度より「主体的・対話的で深い学び」の項目において否定的な変容があった。なぜでしょう?

普段の見立てとは違う印象だなあ。その子は学びに参加できているだろうか?!

学力の伸びにつながる分析情報を活用し、授業のみならず全ての教育活動でアプローチができます。

③

採点時間の短縮により児童生徒の早期の振り返りが可能

児童生徒は

自分の課題を見付け課題克服へ向けて早期に取り組む

教師は

児童生徒一人一人に応じた指導や支援を早期より行う

個に応じた効果的な指導・支援を早期に議論し、授業改善や児童生徒への学習指導の改善を図ることができます。